

## 平成30年度事業実績

本年度は、日本で初めて、日本手話を教育言語するフリースクール龍の子学園（後に正規の小学校明晴学園となる）出身の学生を含む4名の入学生を迎えた。一方、4名の卒業生のうち一名は公務員になり、また二名は教職資格を取り、一名は福祉施設に就職した。

本年度は、動画による高校卒業程度認定試験の指導を動画本格的に配信し、NHKの「ろうを生きる・難聴を生きる」に取り上げられた。非常に多数の聴覚障害をもつ高校生が不登校になっていることがあらためてわかった。

これまでの事業の継続としては、第一に聴覚障害をもつ学生の授業に質の高い情報保障、すなわち手話通訳・パソコンテイクを提供した。第二に、ろう者の母語である日本手話でろう者の教授陣が直接授業を提供した。これはろう者のみが教える日本で唯一の正規のコースであるため、他大学の学生も単位互換制度を使って受け入れてきた。昨年度成果が単行本として出版され、その内容はEuropean Language Council（ヨーロッパ言語協議会、於ワルシャワ）のLanguage Right: Issues and good practices（言語権会議）に選ばれ、ワルシャワでプレゼンテーションを行った。第三に情報保障付き授業とろう講師の手話による授業の二本立てでのろう・難聴の高校生のための進学支援を行った。

### 事業1 「日本手話による教養大学」

日本社会事業大学文京キャンパス（一部清瀬キャンパス）にて、ろう者講師が担当し手話で教授する「手話による教養大学」を開催した。一年次も積極的に受講した他、二年次以上の学生や単位互換制度を利用した他大学の学生が受講した他、聴講生として社会人も受講した。

文京キャンパスでは、前期10科目、後期9科目開講し、受講生は外部のろう者がのべ29名、学内のろう学生がのべ22名、支援者等、清瀬の聴者の学生が135名であった。ろう学生にとって母語で教育を受けられるという非常に大きな意義のある講座となっている。

### 事業2 学内支援

#### (1) 社会福祉学部等の授業における情報保障者の提供

複数の資格取得を目指す学生が出て来て、履修を制限することなく情報保障を付けることは支援者確保の点で難しくなってきたが、なんとかコーディネートすることができた。情報保障（ノートテイク、PCテイク、手話通訳）を受けたのは、学部一年生4名、二年生5名、三年生4名、四年生4名、大学院博士前期課程1名、計19名であり、支援を行うにあたっては、対象学生と入念なミーティングを行い、各学生の状況及び各授業の教育目的に沿った支援を行うよう心掛けた。学生支援者は約50名が登録している。

#### (2) 情報保障者養成の実施

養成の事業としては、経験者学生による講習会を適宜行い（個別に申し出があるたびに必ず対応した）、また昨年設置したコミュニケーションバリアフリー課程で5名の支援者を養成した。5年前数名から始めたパソコンテイクは現在50名の登録者があり、そのうち15名以上が常

時活躍している。

### (3) ろう・難聴スペシャルデーの開催

8月26日(日)に聴覚障害をもつ受験生のためのオープンキャンパスを清瀬キャンパスで開催した。手話通訳・パソコンテイクつきの進学相談や、支援者および聴覚障害の在學生と高校生やその保護者たちとの交流会も開催した。今年度の交流会は、プロジェクト室スタッフで元ななふく施設長・元熊本市障害者相談支援センターピアカウンセラーの岩田恵子と、本学卒業生でろう学校教師の平山彩美をゲストに、ソーシャルワーカー・ろう学校教師の仕事について話してもらう時間も設けた。プロジェクト室にはろう文化を紹介した書籍やDVDの紹介コーナーも設けた。聴覚障害の学生・保護者ら9名に一日キャンパスの中で過ごしてもらい居心地のよさを体験してもらった。在学中の聴覚障害学生も参加し、高校生へのアドバイスや、大学紹介をしてくれた。

### (4) オープンキャンパスでの支援実施

大学で毎年実施するオープンキャンパスでも、来場者の希望するプログラムに手話通訳・PC通訳を配置した。各回、数名の聴覚障害の高校生が訪れた。プロジェクト室のスタッフは必ず出勤し、聴覚障害をもつ高校生の急な参加にも対応できるようにした。

### (5) 国家試験対策講座

当事者ソーシャルワーカーの養成として、手話による社会福祉士国家試験の対策講座を開講した。今年度も集中講座の形で、10:00~17:00という時間帯で全4回(11月17日・12月15日・1月12日・1月13日)開講した。受験を控えた4年生だけでなく、1~3年生も受講した。

### (6) 文科省高校卒業認定試験の対策講座準備

昨年度に引き続き、文科省高校卒業認定試験対策の教材作成をした。昨年度文科省に許可をとった過去問について、原稿作成と手話動画作成、ホームページ整備を進めた。2019年3月23日「ろうを生きる 難聴を生きる」でこの取り組みが取り上げられた。

## **事業3「ろう・難聴高校生の学習塾」開講**

聴覚障害を持つ高校生を対象に、ろう者の講師が手話で教えるクラス、聴者の講師が情報保障付きで教えるクラスの両方を用意した塾を開講した。1学期・2学期・3学期に加えて、夏期講習・冬期講習・春期講習を開講した。

1学期は5月18日~7月13日の毎週金曜日、全9回開講し、31名が参加した。夏期講習は8月23日・24日・30日・31日の4日間開講し、25名が参加し、2学期は9月28日~11月16日の毎週金曜日、全8回開講し、50名が参加した。冬期講習は12月21日・22日の2日間開講し、29名が参加した。3学期は1月25日~3月15日の毎週金曜日、全8回開講し、38名が参加した。春期講習は3月22日・23日の2日間開講し、20名が参加した。

- 1学期：5月18日(金)~7月13日(金) 毎週金曜。9回。



18:00-19:40	英語基礎	英語標準	国語基礎	数学基礎	英語標準	英語基礎	数学標準	国語標準
19:55-21:05	英語基礎	英語標準	国語標準	数学標準	英語標準	国語標準	数学基礎	国語標準

今年度も1コマ70分とし、国語（現代文・小論文）・数学・英語・AO推薦対策の授業を開講した。会場は昨年度と同じ新宿三丁目の会議室を利用した。

引き続き中学2年生も受け入れ、高校進学のための指導も行った。また、浪人生も複数参加し、それぞれに合せた受験指導を行った。

大学進学希望の生徒は16名で、13名が大学（うち1名は短期大学）に進学し、2名は途中で専攻科に進路希望を変更して専攻科に進学、1名は専門学校に進学した。中学3年生や高校1年生から参加している受講生が大半で、学習塾での指導の成果が出ていると思われる。また、ろう学校の生徒が多く、ろう学校から着実に大学進学者を輩出できていると言える。

卒業生の進学先大学一覧は以下の通りである。

#### 2018年度「ろう・難聴高校生の学習塾」卒業生進学先大学一覧

進学先	人数	出身高校名
嘉悦大学	1人	中央ろう学校
関西学院大学	1人	伊志田高校
恵泉女学園大学	1人	中央ろう学校
筑波技術大学	3人	中央ろう学校2人、葛飾ろう学校1人
東京未来大学	1人	中央ろう学校
東洋大学	1人	中央ろう学校
日本社会事業大学	1人	都立小平高校
山野美容芸術短期大学	1人	中央ろう学校
立正大学	1人	中央ろう学校

専攻科 2名、専門学校 1名 ※2名進学先不明

昨年度に引き続き、中学生からの問い合わせが増えている。中には小学校高学年の生徒の保護者からの入塾についての問い合わせもある。入塾は中学3年生からとしているが、中学1年生・2年生からの問い合わせも多い。昨年度同様、中学生であっても高校生よりもレベルが高い場合もあり、学習レベル・年齢が多様化している。

参加受講生は、初めて50名を越え、希望のクラス形態（手話クラスか情報保障付クラスか）や希望科目、レベルが多用途で講師・教室不足が引き続き課題である。

受講生の年齢・レベルが多様化する中で、限られた予算でいかに時間割を作成し指導にあたるかが課題である。

これまでは、手話ができる生徒はろう者講師の手話クラスに、手話がわからない生徒は聴者の情報保障付クラスに参加する傾向があったが、手話者でありながら情報保障付クラスを希望する生徒も増えている。その場合、情報保障の文字を読み、生徒は手書きで発言をしている。生徒の数が増え、希望やニーズが多様化し、クラス分けが複雑になる一方で、手話ができる生徒はさまざまなクラスの選択肢があり、自分に合ったクラスを選択してもらうことができている。

学習塾は基本的に高校生向けであると説明をしているが、中学生以下のろう児の保護者からの問い合わせも急増している。また、学習塾に通えない地方の高校生からの問い合わせも多く、

対応を考えたい。

## 総括

2013年度以来、入試への「日本手話」の導入を行い、その入試枠を含め、着実にろう学生が入学しており、学部だけでも約15名のろう学生がいるため、多くの聴こえる学生も手話を覚えている。全体がバイリンガル環境になってきている。その他に通信科の学生もいる。

2018年度から新たに始めた高校卒業認定試験対策の動画配信は、3月23日にNHKの「ろうを生きる・難聴を生きる」で取り上げられ、その後反響もあり、不登校のろう生徒が多くいることがあらためて浮き彫りになった。

支援者養成としては、本学独自の事業として日本初の専門家養成課程「コミュニケーションバリアフリー」が文科省にBP（ブラッシュアップ・プログラム）として認可され、三年目の本年は5名の受講生を迎えた。この中では「ろう通訳者」（アメリカなどで発祥した盲ろう支援や、リレー通訳で活躍する手話を母語とするろう当事者の通訳者）の養成も進んでいる。

本事業は当事者ソーシャルワーカーを毎年5名輩出することを目標としている。また日本手話による教養大学に学生を集めて、日本手話を母語とする学生が、母語で大学教育を受けられるようにすること、また大学進学率が健聴者より著しく低いろう・難聴の高校生に大学進学支援を行い、大学入学をさせることも目標としている。本年度は新たに全国の高校生を対象に文科省高校卒業認定試験対策の動画等での支援を行うことを目標にした。

当事者ソーシャルワーカーを年間5名養成しようという目標は学部4名、通信科も含め達成できた。また日本手話による教養大学は、かなり周知されてきた。2017年度、その軌跡を単行本にし、出版し、ヨーロッパ言語協議会の言語権会議では **Issues and good practice** に選ばれた。ろう・難聴の高校生の塾も一定数の生徒が集まるようになり、高校三年生9名中、9名全員が大学進学（うち1名は本学に入学）を果たした。また最近では中学生からも問い合わせが増えて、見学は認めているが、その中で、中学生用の授業でなくてもよいと、高校生とともに学んでいる生徒もいる。

本年度の成果として、第一に、卒業生で初の教師以外の公務員が誕生したこと、第二に手話による教養大学が国際的にも認められたこと（ヨーロッパ言語協議会）、第三にこれまでの実績が認められ、文科省の「障害者の多様な学びを総合的に支援する研究事業」が本学に（私立大学では唯一）委託されたこと、第四に、高校卒業認定試験の対策のための動画作成がNHK「ろうを生きる・難聴を生きる」で取り上げられ、不登校の聴覚障害の生徒を浮き彫りにしたことが挙げられる。

卒業生で初の公務員が誕生したことは情報保障つきの授業の賜物である。手話による教養大学については多分野の第一人者による講師陣の力が大きい。文科省の「障害者の多様な学びを総合的に支援する研究事業」が委託されたことは、聴覚障害者の多様な支援の成果が認められたとおもわれる。高校卒業認定試験の対策のための動画作成が新聞（教育学術新聞）やNHK（今年度）に取り上げられたことは、これまで見えてこなかった不登校のろう高校生に気づいたこと、同じ思いをした学生たちが意欲的に動画教材に出演してくれたことが成功の要因である。

事業成果物：毎日新聞 2018年1月27日の記事

『手話による教養大学』（ミネルヴァ書房 2017)